



TITLE:

マカロックの戦後恐慌論

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. マカロックの戦後恐慌論. 経済論叢 1939, 48(4): 608-624

ISSUE DATE:

1939-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131235>

RIGHT:

經濟叢論 每月一日發行
 第四十八卷第四號 昭和十四年四月一日發行
 大正四年六月二十一日第三刷郵便物送可

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號四第 卷(十四第)

月四年四十和昭

(禁轉載)

論叢

絕對價格の問題……………文學博士 高田保馬

マカロツクの戦後恐慌論……………經濟學博士 谷口吉彦

ケインズの「一般理論」に就いて……………經濟學博士 柴田敬

時論

日滿支の農業調整……………經濟學博士 八木芳之助

研究

時局下の貨銀統制……………經濟學士 大塚一朗

日本資本主義の性質に就て……………經濟學士 堀江保藏

日本再保險市場の構成……………經濟學士 佐波宣平

說苑

北支平原の土壤……………經濟學士 菊田太郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

マカロックの戦後恐慌論

谷口吉彦

目次 一 マカロックの歴史的・社會的存在 二 戦後恐慌の原因 三 一般的過剰の否定

一 マカロックの歴史的・社會的存在

一七九三年から一八一五年まで斷續したナポレオン戦争は、二十三年の長きにわたる謂はゆる長期戦争となつたが、この戦争の勃發・中止・再開・終局と關聯して、屢次の恐慌を勃發せしむることとなり、謂はゆる過渡的恐慌の時代を現出せしめたことは、さきに詳論せる所である¹⁾。然るに一八一五年には平和克服による恐慌が現はれ、之について戦後の不況期に入つたが、一八一九年には再び恐慌となり、更に一八二五年の恐慌まで、約十年にわたつて謂はゆる戦後の永續的不況となつた。是等の戦時および戦後の恐慌に刺激せられて、當時の經濟學者の間に、恐慌に關する盛んなる論議と論争とを惹きおこしたことは、極めて興味ある事實であるが、この論争の最初の發端となつた學者は、今こゝに問題とするマカロックであつた。

John Ramsay McCulloch (1789—1864) はリカアドウよりも十七年おくれて、一七八九年三月スコットランド Wigloveshire の Whitorn に生れた。それは恰かもかのアメリカ獨立戦争の終了した一七八三年から、次のナポ

1) 拙著「恐慌に關する諸學說(改造社經濟學全集第十四卷)」
2) 拙著「恐慌前掲書」

レオン戦争の勃發に至る十年餘の平和時代の中間にあたり、イギリス資本主義がその産業革命における最初の一大飛躍をなせる時代であつた。³⁾ 彼れの父はその地の小地主であつたが、マカロックは弱年にして父を喪ひ、外祖にあたる牧師 Dr. James Laing に引とられて養育された。このレーン博士は優れた古典學者であり、且つ有名な藏書家であつたから、マカロックの向學心と藏書癖とは、彼れの感化による所が大であつたと言はれる。次いで母の再婚に従つて、Dr. Dempster の許に行き、こゝで幼時の教育をつけた後、一八〇五年頃エジンバラに遊學することゝなつた。⁴⁾

エジンバラ大學に入つて法律學を修めた彼れは、卒業後その地の法律事務所に入つて辯護士を志してゐたが、次第に經濟學に興味をもつに至り、後には法律學を棄てゝ専ら經濟學を研究することゝなつた。⁵⁾ この間にナポレオン戦争は斷續して進み、産業革命は繼續して進行すると共に、謂はゆる過渡的恐慌は一七九三年、一七九七年一八一〇年、一八一五年と連續して頻發した。法律學から經濟學に轉向した若きマカロックが、これらの恐慌に對して、全く無關心であり得なかつたことは、容易に想像される所であるが、果して一八一六年に至り戦後恐慌の翌年において、彼れの最初の著述が公けにされた。『國債利下論』(An Essay on a Reduction of the Interest of the national Debt, 1816)これである。この書は戦時公債の利下げによつて財政負擔を輕減せんことを主張するものではあるが、併しその趣旨は單なる財政論に止まらず、彼れの主張に従へば、かゝる利下げこそ『商業および農業利益の窮乏を救済するための唯一の可能なる方法』⁶⁾であると考へたからに外ならぬ。即ちそれは當時の商業および農業恐慌の打開策について論議するものである。恐慌打開策が彼れの最初の著述であつたことは、彼れ

3) 拙著、恐慌に関する諸學說(改造社 經濟學全集 第十四卷 p. 25)
4) Reid, H. G., Biographical Notice (M'Culloch's Dictionary of Commerce, 1871)
5) Smith, G. B., M'Culloch (Palgraves D. of P. E. Vol. II, P. 657)
6) 國債利下論の副題: Letters of Ricardo to M'Culloch (Publications of the American Economic Association Vol. X, 1895) Smith, G. B., ibid. p. 657.

の歴史的存在と關聯して、吾々の特に興味を覺える點である。

然るにこの『國債利下論』を機縁として、彼れとリカアドウとの學問的交際が始まつた様である。マカロックはこの小冊子をロンドンに送つて、當時すでに經濟學者として著名となりつゝあつたトカアドウに獻本したものの如く、之に對するリカアドウの謝禮と批評の手紙が、二人の文通の最初のものとして發表されてゐる。即ちリカアドウは一八一六年六月九日附の手紙において、まづ獻本に對する謝辭を述べたる後、恐慌對策としての利下論を批評してゐる。

『併しながら私は、吾國の現在の困難に對して、貴下の提案する國債利下げの斷乎たる方策を採るの必要について、貴下に贊成することは出来ない。何となれば斯くの如き方法は、たとひ一階級の損失において他階級を利益するとは言へ、それは殆んど國家を救済しないであらし、また最も警戒すべき危険な性質の前例を作ることとなるであらう』

然るにマカロックの小冊子は數ヶ月の後さらに増補せられて、五三頁の小冊子は大版二〇〇頁の單行本に擴張されて再版された様である。⁷⁾けれども著者の根本的見解は何ら變更されてゐなかつたから、再び新本を贈られたリカアドウは、同様に反對意見を書き送つてゐる。

『貴下の増補された論文は、私にとつて教訓的であり愉快であつた。けれども私は今も尙ほ、わが國民を現在の困難から救済するために貴下の提案する方法を正しとして貴下に賛成することは出来ない⁸⁾』

恐慌打開策としての國債利下げ説は、かくの如きリカアドウの反對ありしたためか、または他の事情によるものかは不明であるが、兎も角マカロックは後に至つてその主張を拋棄または變更せるものゝ如く、例へば一八二一年の論文には、國債の元本または利率を引下げること、は、必要の點からも正義の點からも、支持され得ないかの

7) Letters of Ricardo to M'Culloch, *ibid.*, p. 1.

8) Letters of Ricardo to M'Culloch, *ibid.*, p. 3.

9) Letters of Ricardo to M'Culloch, *ibid.*, p. 3.

如く主張されるに至つた。¹⁰⁾ それかあらぬか、この最初の出版物は、マカロック自身も後には努めて之を無視した形跡が指摘されてゐる。¹¹⁾ 例へばその後の著述目録にはこの書は殆んど全く除かれてゐるし、また彼れの編纂した『經濟學文獻』¹²⁾にも之だけは除外されてゐる。けれども吾々は別の見地から、即ちそれが恐慌打開策の論議であるといふ意味から、之に對して特殊の興味を禁じ得ないものである。

マカロックの第二の發表は、一八一八年六月始めて *Edinburgh Review* に寄稿した *On Ricardo's Principles of Political Economy and Taxation* である。この批評を讀んだリカアドウの興味ある手紙は、八月二十二日附をもつてマカロックに送られてゐる。

『私はエデンバラ・レビューの最近號に出た私の書物に對するお世辭的な批評を讀んで、私の感ぜられる愉悅を十分に味つた後私は自然にその筆者が誰であらうかと考へ始めた。そして直ちに貴下を思ひ浮べた。と言ふのは私の打ち建てようと努めた學說に對して、貴下ほど完全に賛成するものは、レビューへの執筆者の中では、友人のミルを除いては他にあらうとは思はれず、而もそのミルが書いたのではないことを、私は知つてゐたからである』¹³⁾

リカアドウの言ふ如く、マカロックはこゝで最上の推賞を措まずリカアドウを紹介し、『私の見る所では、彼れは恐らく經濟學の發展に對して、唯一の例外スミスを除いては、他の如何なる著者よりも大なる貢獻をなした』¹⁴⁾と言つてゐる。けれども彼れの紹介の内容はリカアドウの價值論を中心とするものであり、われ／＼の茲に問題とする恐慌論については殆んど觸れてゐない。それ故にマカロックのこの論文は、こゝでは重要な意義を有つてゐない。たゞこの寄稿が機縁となつて、彼れとエデンバラ・レビューとの關係が結ばれ、それ以來一八三七年

10) *Edinburgh Review*, July, 1921. p. 482-484.

11) *Letters of Ricardo*, p. 9.

12) M'Culloch, *The Literature of Political Economy*, 1845.

13) *Letters of Ricardo*, *ibid.*, p. 9.

14) *Edinburgh Review*, June, 1818, p. 60.

まで約二十年にわたつて、彼れは極めて屢々之に評論の筆を執り、その論文はすべて七十八篇の多數に及んでゐる。¹⁵⁾これら多數の論文のうち、特にわれゝの當面の問題と直接に關聯するものを拾ひ上げれば、次の數篇がある。

On Commercial Embarrassment and Trade with France, 1819.

On Effects of Machinery and Accumulation, 1821.

On Agricultural Distress: Causes and Remedies, 1822.

On Standard of National Prosperity, Rise and Fall of Profits, 1824.

On Commercial Revisions, 1826.

On Causes and Cure of Disturbances and Pauperism, 1831.

On Chalmers on Political Economy, 1832.

On Causes and Consequences of the Crisis in the American Trade, 1837.

當時の經濟學者にしてマカロックの如く多數の獨立の論文を發表したものはない。彼れは多年にわたり、當時におけるイギリス最高の學術評論雜誌たるエデンバラ・レビューに據り、その經濟論文を全く一人で獨占してゐた。ことに前掲の如くその中に多數の恐慌に關する論文を含んでゐることは、少くとも恐慌理論史上においては看過し得ざる事實である。これ吾々が、一般理論史上における彼れの地位如何に拘らず、彼れの恐慌理論を特に問題とする一つの理由である。

マカロックはまた同時に一八一七年の頃より新聞 Scotsman へも屢々寄稿し、一時はその主筆として入社し、直言をもつて當路者を鞭撻し、ことにその經濟論は彼れの執筆によつて有名となつたから、スコツツマン紙は地

15) Reid, *ibid.*, p. xxxi.

16) Reid, *ibid.*, p. xxii.

方新聞から一躍して全国的に名聲をあげたと言はれる。¹⁶⁾ 同紙との関係は一八二七年まで十年餘も繼續した。これは彼れが單純なる學究的の經濟學者にあらざること、従つてまた彼れの恐慌論を見る上に注意すべき彼れの生活の一面であらうと思はれる。

一八二三年五月ごろ彼れは始めてロンドンに出で、そこで年來の宿望を達してリカアドウと初見した様である。¹⁷⁾ けれども七月にはすでにエヂンバラに歸着してゐるから、これは短期の旅行に過ぎなかつたが、翌年には再びロンドンに出で、そこで經濟學の講習を開いてゐる。これより先きエヂンバラにおいても同様の講義を試みたことがあり、¹⁸⁾ これらの稿本を纏めたものが、*Supplement of the Encyclopædia Britannica* における『經濟學』となつて現はれた。

かくして經濟學者としての彼れの名聲は次第に高まつて來たが、一八二五年には新たにエヂンバラ大學に經濟學の講座を設けんとする運動おこりマカロックはその講座を擔任する教授として推薦せられ、一時は可なり有望に進捗してゐたが、講座新設の頓挫すると共に、この運動は遂に實現せずして止むだ。²⁰⁾ 而してこの年の終りに近く、彼れの『經濟原論』(*The Principles of Political Economy*, Edinburgh 1825)が出版された。之はさきの百科全書への執筆を基礎とし、之を増訂して新たに書き改めた全くの新著であつた。この書は一般經濟理論としては、主としてスミスとリカアドウを祖述したものであり、一般學說史上では高く評價され得るものではないが、併しこの出版は恰もかの最初の近世的恐慌の現はれた一八二五年に當り、彼れも屢々この恐慌に言及し、特に生産過剰の原因につき論述してゐる。これ彼れの『經濟原論』が少くとも恐慌理論史において看過し得ざる所以である。一

17) Letters of Ricardo, *ibid.*, p. 148.

18) Letters of Ricardo, *ibid.*, p. 152.

19) Reid, *ibid.*, p. xxiv.

20) Reid, *ibid.*, p. xxiii.

般學說史上における彼れの地位如何に拘らず、茲に特に彼れの恐慌論を問題とする第二の理由はこの點にある。

エジンバラ大學の講座の失敗に拘らず、一八二七年にはロンドン大學の經濟學教授に任命せらるゝこととなり、翌年にはいよいよ家族を纏めてロンドンに移住することゝなつた。²¹⁾この講座は新たに設けられた無給のものであつたらしい。彼れは一八三二年までこの職に留まり、暫らく閑地にあつた後、一八三八年から Her Majesty's stationery office の監督官となり、一八六四年の死に至るまで終生この職に留まつて、政府出版局の内部改善に力を盡す所が多かつた。²²⁾

この間にも彼れの研究生生活は終始一貫して繼續せられ、ことにこの最後の地位は、彼れの蒐集趣味または藏書癖を充たすに恰好のものであつたらしい。彼れの藏書は無慮一萬冊に達し、而かも彼れは其の大部分を讀破して、その内容を解説し批判し註釋して、遂に浩瀚なる藏書目録 (Catalogue of the Library of a Political Economist) を編成してゐたが、之は遂に公刊を見ずして終つたといふ。²³⁾彼れの著述の中には、かゝる蒐集なくしては成し能はざるものが少くない。彼れの精力と讀書力とは、恐らく當時の何れの經濟學者も及ばぬ所であらう。けれども斯くの如き彼れの長所は、同時に彼れの短所ともなり、彼れは讀書に追はれて、思索の餘裕を持たぬかの憾を免れない。人は彼れを評して、『マカロツクは決して獨創的の思索家ではない。けれどもスミスおよびリカードの最も近い生徒であり、またその信奉者であつて、彼等の原理を解説し、また十九世紀初頭に行はれてゐた經濟問題に關する考へを廣く傳播するに力を致し、これらに關する有益な立法を促進した』²⁴⁾と言つてゐるのは、蓋し適評であらう。最後に彼れの主要著述を左に列舉する。勿論この外にも多數の編著や小冊子や論文がある。

21) Reid., *ibid.*, p. xxiv.

22) Reid, *ibid.*, xxvi.

23) Reid, *ibid.*, p. xxviii.

24) Smith. G. B., *ibid.*, p. 657.

1. An Essay on a Reduction of the Interest of the National Debt, 1816.
2. A Discourse on the Rise, Progress, peculiar Objects and Importance of Political Economy, 1824-1825.
3. The Principles of Political Economy, 1825.
4. An Essay on the Circumstances which determine the Rate of Wages and the Condition of the Labouring classes, 1826.
5. A Treatise on the Principles, Practice and History of Commerce. 1831.
6. A Dictionary of Commerce and Commercial Navigation 1832.
7. A Statistical Account of the British Empire, 1837.
8. A Treatise on the Principles and Practical Influence of Taxation and Funding system. 1845.
9. The Literature of political Economy, 1845.
10. A Treatise on the Succession to Property vacant by Death, 1848.

二 戦後恐慌の原因

恐慌に関するマカロックの論議の最初に現はれたのは、恰かもかのナポレオン戦後の第二の恐慌すなはち一八一九年の恐慌の時である。この年の七月に出版された *Edinburgh Review* に、彼れは『商業恐慌とフランス貿易に
つゝ』(On Commercial Embarrassments and Trade with France) と題する一文を寄せて、この恐慌の原因を考
へ且つ対策を論じてゐる。次いで同年十月號の同誌にも『この國民窮迫の救済に對するオーウェン氏の計畫』(Mr.
Owen's Plans for Relieving the National Distress) と題する一文を執筆して、かのオーウェンの『社會の新見解』
(A New View of Society)その他を批判し、之に關聯して當面の恐慌に關する論議をなしてゐる。

一八一九年の恐慌後も、謂はゆる戦後の不況は繼續して、遂に一八二五年の戦後第三の恐慌となつたが、この

不況期にあたる一八二二年には、マカロックは三たび恐慌に關する論議を發表してゐる。即ち前掲エヂンバラ・レビュー七月號に『機械および蓄積の結果』(Effects of Machinery and Accumulation)につき執筆し、この問題に關する Say, Simondi, Malthus の見解を批判してゐる。これは本來は一般的・理論的な問題ではあるが、併し現實の戦後恐慌についてもまた論議されてゐる。以下においては主として是等の資料に基づいて、先づ彼れの戦後恐慌に關する見解を見ることとする。

マカロックは先づ戦時に於ける好況と戦後における反動とを對照せしめて言ふ。

『最近の戦時中において吾國産業界は巨額の重税を課せられたに拘らず、比較的好況に潤つたが、これは平和克服後に捲き込まれてゐる前例なき窮迫と著しき對照をなしてゐる。』

『戦争の打撃は、一般に戦後よりも戦時中において、より深刻に感ぜられるとは言へ、かゝる試練を無害で切り抜けることは、いかなる國家にとつても不可能である。一般に戦争は損のゆく勝負である。従つて早かれ晚かれ悲惨な結果を招來せねばならぬ。』

『特殊の諸事情の隨伴する場合には、一時的には資本の避くべからざる損耗や國民産業の誤れる指導を明瞭ならしめないことはあるが、併し結局においては、是等すべての打撃を加重することは確かである。必ずや此の人為的刺戟は最早用ひられざるに至る時が來て、それが止められる時には、これまで胡麻化され又は一部かくされてゐた種々の打撃は、それが自然に放任された場合²⁵⁾に起つたであらうよりも遙かに烈しいのみならず、その數においても、その害毒においても、實際に増大されるであらう。』

之によれば、戦時中の好況は、人為的政策によつて戦争の打撃が隱蔽されてゐるからであり、従つて此の好況が大なれば大なる程、戦後に來るべき恐慌は、その反動の程度を大にするであらうと考へる。即ちこの恐慌の直接の原因は、戦争から平和への轉換にあると言ふ。

『現在の恐慌 (embarrassment) は先づ第一に、戦時状態から平和状態への推移によつて惹きおこされたショックに歸せられる。而してその影響はこの特定の場合には特に著しく誇張されてゐるとは言へ、かゝる推移は常に多少の打撃を伴はねばならぬことも確かである。²⁶⁾』

それ故に戦後恐慌の程度は、戦時景氣の程度に正比例し、戦争打撃の程度に反比例する。例へばフランスの如く打撃の甚大にして、戦時景氣の起らなかつた國は、戦後恐慌の程度は輕微であるが、イギリスの如く戦争損害の大ならず、戦時景氣の煽揚されてゐた國では、戦後恐慌は却つて甚大とならざるを得ないと言ふ。

『戦時状態から平和状態へ移る場合に經驗する困難の大部分は、明らかにその推移をなす國のそれ以前の政治状態に依存せねばならぬ。戦時中にその國の産業が拘束され、制限され、その國の資本が不利な事業に強制されてゐた國は、平和克服の場合には比較的輕微な困難を經驗するに過ぎない。……』

『最近の戦時中において、フランスは巨大な軍備を維持し、且つ國家の能力と産業の遙かに大なる部分が、軍事的業務に吸収された。……その國の資本と熟練の大なる部分は誤れる方向を與へられたに拘らず、フランスは戦争から平和への推移によつて殆んど何らの困難も經驗しなかつた。……』

『イギリスの戦時中における状態は、全くフランスのそれと逆であつた。その産業は不自然に壓迫されどころか、從來の歴史において未だ嘗て知られない程度に、刺激され獎勵された。²⁷⁾』

『然るに平和克服は、吾國の繁榮が脆弱な不安な根柢の上に大袈裟な組織を作り上げてゐることを曝露した。二十年間も不斷に吾國の産業に加へられてゐた人爲的の獎勵が撤回されるや否や、直ちに總ての産業部門において麻痺状態を感じるに至つたのである。²⁸⁾』

然らば戦争から平和への推移は、何故にかゝる恐慌を惹きおこすか、

『需要の急激な停止は……必然的にその生産に従事する人々をして、著しい窮迫と困難に陥らしめる。²⁹⁾』
『準備されたる市場の缺乏が、疑もなく我國の工業者および農業者の窮迫の直接の原因である。……海外需要の缺乏は……』

26) Edinburgh Review, *ibid.*, p. 48.
27) Edinburgh Review, July 1819, p. 49-50.
28) Edinburgh Review, July 1819, p. 52.
29) Edinburgh Review, July 1819, p. 48.

次の二つの原因の何れから起らねばならぬ。即ち吾國の商品が比較的の高い結果か、またはイギリス商品の諸外國への輸入および外國商品のイギリスへの輸入の上に課せられた制限の結果か、何れかでなければならぬ。³⁰⁾』

然るに彼れに従へば、イギリス商品の價格が諸外國よりも高いとは考へられないから、そこで右の第二の原因のみが問題となる。即ちこの恐慌の原因の一つは、外國貿易に對する制限にあると主張する。

『第二に、貿易に對する吾國の野蠻的な制限は、好況を永續せしめる源泉を奪つてしまふ。この源泉は自然の成行に放任すればまた自由貿易の下においては、國內農業がその資本收益率を低下せずしては、最早擴張され得ない國に對して、工業上の進歩によつて齎らされるものである。³¹⁾』

次に戦後恐慌の第三の原因として、マカロツクは過重な課税を擧げる。重税のために、生産費を高めて輸出市場におけるイギリス商品の競争力を弱め、他方には資本家の利潤を低めて資本蓄積を阻害するか、または海外投資を刺激する。その結果はイギリス労働階級の失業問題を惹きおこすと主張する。

『第三に、租税徴収者は産業の過剰生産物の餘りに大なる部分を取り去るので……多くの場合に農家および製造家は、殆んどその投資を回収するに足りない程のものが残るに過ぎない。』

『その結果として、食料品および原料品の生産費を高め、市場における平均價格は、近隣國におけるよりも一〇〇%も高くなつてゐる。また利潤および利子の低率のために、資本は全く蓄積を止めるか、または國內において得られない有利な事業を外國投資に求める。更に吾國の労働階級は、比較にならぬ精力と熟練を有するに拘らず、失業に陥つて、生活のために彼等の地方から追ひやられてゐる。³²⁾』

かくして彼れに従へば、戦後恐慌の原因は平和克服による需要の變動と、外國貿易に對する制限と、過重な戦後の課税にあると言ふ。彼れは他の所においても亦同様に、右の三原因を擧げてゐる。

30) Edinburgh Review, March, 1821, p. 106-108.

31) Edinburgh Review, October, 1819, p. 462.

32) Edinburgh Review, October, 1819, p. 462-463.

『現在の恐慌は特殊の諸事情によつて、一般原則の作用からは離れた一つの場合を成してゐる。第一に……戦争から平和への推移は、或種の商品をして從來よりも需要を減退せしめた。従つて一時的には市場に齎らされた各種商品の分量の比例を擾亂した。この比例が商品をして相互にその購買者たらしめ、供給の分量をして需要の大さと等しからしめるものである。』

『第二に、商業は等價物の交換であり、需要と供給とは相互的であるから、若しもイギリスの商人が外國市場に商品を送るならば、貿易制限の下では、それは外國人が購買に提供しうる唯一の財の輸入を妨げることとなるから、かゝる商品は必然に賣れずに残らねばならぬ。かゝる事情の下に、イギリス商品の外國市場における過剰は、吾々の一般原理に對する反證ではなくて、却つて經驗に先だつてその原理が吾々に豫言してゐる事實である。』

『最後に、租税は、機械の進歩が生産費を引下げる自然的傾向を妨げる。その結果として、吾國の製造品の交換價値の低下を妨げる。然らざる場合には之に對する需要は、その供給の増大と共に擴大せしめられる筈である。』

マカロックは尙ほ是等の原因の外にも、例へば限界耕作地の過度の擴大や、通貨價値の變動等にも言及してゐるが、併し是等の原因は、前記の三原因に比すれば、さまで重要なものとは思つてゐない様である。

さて戦後恐慌の主要原因をかくの如く把握したマカロックは、この原因に關聯して恐慌對策を考へる。即ち戦争から平和への推移による需要の減退は、直接には之を如何ともすることは出来ない。そこで彼れの對策は、第一および第三の原因に對應する。即ち貿易制限の撤廢による自由貿易の確立および租税の輕減にある。

『戦争から平和への推移によつて惹きおこされ、また一事業から他の事業への資本の移動に伴ふ損失によつて惹きおこされた部分の困窮は、暫時の後にはそれ自身の矯正力によつて回復する。が他の部分即ち國民困苦の大部分は保護貿易および壓迫的租税によつて惹きおこされたものであり、その原因の續く限りは、永續するであらう。』³⁶⁾

『貿易に自由を與へよ、租税の重壓を輕減せよ、然らば巷間の不平は無くなるであらう。貿易は常に等價物の交換であるから、買はない國は賣ることは出来ない。従つて輸入に對する制限は、輸出に對する禁止的關税である。』³⁷⁾

33) Edinburgh Review, October, 1819, p. 474.

34) Edinburgh Review, October, 1819, p. 462.

35) Edinburgh Review, March, 1821, p. 103.

M'Culloch, J. R., The Principles of Political Economy, 1843, p. 195, 211.

36) Edinburgh Review, October, 1819, p. 474.

而かもマカロツクの見るところでは、イギリスにおける保護貿易から自由貿易への轉換は、この時機を以つて絶好の機會であると考へる。何故かと言ふに、この轉換は何れの時代に行はれたとしても、保護政策の撤廢による一時的混亂は免れ得ないのであるが、今この恐慌を機會に轉換するならば、そのために蒙るべき特別の混亂を免れて之を實現しうるからである。

『制限貿易を急速に廢止することによつて惹きおこされねばならぬ衝動または混亂の多くは、すでに起つてゐる。……それ故に立法は比較的容易に、且つ特定の生産者階級に大なる損失を與へることなくして、休閒資本の大なる部分を、最も生産的なべき部門に轉換させることが出来る。排他的制度を廢止または緩和するには、今日よりもよい機會を考へることは確かに不可能である。』³⁷⁾

三 一般的過剰の否定

戦後恐慌の原因および對策に關するマカロツクの見解は、以上に検討する所であるが、吾々にとつての關心の中心は、この積極的な彼れの見解そのものよりも、寧ろ消極的な彼れの見解にある。即ち彼れが戦後恐慌の原因をもつて、戦争から平和への轉換に伴ふ需要の變動と、外國貿易に對する制限と、租税の重課とに歸することは之を反面から言へば、この恐慌が生産過剰の結果ではないと主張するものである。ナポレオン戦争と同時に進出したイギリスの産業革命は、この國の生産力を飛躍的に發展せしむることとなり、之による生産過剰が當時の恐慌の根本的原因であるといふ主張は、すでに當時のイギリスにおいても行はれてゐた。オーウエン、マルサスシスモンデの如きは是である。前に述べたるマカロツクの第二の論文は、かゝるオーウエンの主張に反對して執筆されたるものである。

37) Edinburgh Review, October, 1819, p. 475.

38) Edinburgh Review, July, 1819, p. 64.

この論文において彼れは先づ戦後恐慌の三原因に關する自説を述べたる後、オーウェンの主張する新社會が、果してこの恐慌を打開しうるかを検討する。

『かくの如きが廣汎に亙つて深く根ざしてゐると思はれる困窮の諸原因であつて、之を除去せんと意圖するのが、オーウェン氏の提案する施設である。……』

『吾々は率直に言ふ、オーウェン氏の講演および著述に對して少なからぬ注意を拂つたが、併し彼れの前提と結論との間に、何等の明瞭なる關係または連結を發見することは出来ない。彼れの計畫は……吾國の今日の困窮の諸原因には少しも觸れてゐない。』³⁹⁾

『オーウェン氏の理論においては、彼れの計畫におけると同じく、富の生産および分配を支配する總べての法則を全く無視してゐる。彼れは言ふ、吾が國民の當面してゐるこの困窮は、科學的および機械的の生産力が、社會の現存制度の許す消費よりも、より多く生産する所から來るのであると、これは富は貧であるといひ、また生活必需品は過剰にあるから得られないのであると言ふのと同様である。……』

『オーウェン氏の主張する原理すなはち機械の使用は、社會の現存制度の許す消費よりも、より大量の商品の生産を惹きおこすといふ原理は、經濟學の重要な根本的の理論と一致しないから、なほ嚴密な吟味とより科學的な論駁を必要とする。』⁴⁰⁾

『吾國の商品に對する購買者を發見することの困難は、生産力の増大によるものであるとの説を吾々は否定する。反對に、若しも此の増大がなかつたならば、市場は今日實際にあるよりも遙かに縮小してゐたに相違ないことを示すのは容易である。』⁴¹⁾

併しながらマカロックの一般的過剰の否定は、何ら新たな理論的根據に立つものではない。彼れの根據とする所は、すでに他の諸學者によつて主張されたる理論にすぎず、彼れはたゞ是等の理論を援用したに過ぎない。即ちセイの販路説、ミルの需給説、リカアドウの物々交換説等これである。この意味に於て彼れは一般經濟理論史におけると同じく、何等の獨創的または劃期的の地位を占むるものではなく、たゞその當時に行はれた經濟理論を祖述し、之を一般化したるに過ぎない。

39) Edinburgh Review, October, 1819, p. 463.
40) Edinburgh Review, October, 1819, p. 468-469.
41) Edinburgh Review, March, 1821, p. 107.

たゞ恐慌論に關する限りでは、その理論の性質上から、必然に現實の問題に觸れざるを得ず、彼れは即ち當時に行はれた經濟理論を根據として、この現實の恐慌を説明し、且つ之が對策を論究したるものである。またすでに他の機會に論じたる如く、當時の恐慌理論は必ずしも衆説の一致せるものではなく、相反對する二つの理論が對立してゐた。然るにマカロックはその一方の理論に根據して恐慌を見たのであるから、従つてそれは必然に他方の理論に對立せざるを得ない。即ち彼れは理論の創始者または提唱者ではなく、寧ろ一方の理論の信奉者または擁護者であり、従つてその理論のために論争した闘士であると言へる。それ故に彼れにおいては、一般的過剰の否定は何ら重要な論證を必要とせず、殆んど自明の理として採用されてゐる。

『需要の増大は、供給の増大によつて創造されるといふ重要な根本的の原理は、最初かの有名なセイ氏の『經濟學綱要』において、またジェームス・ミル氏の『商業辯護論』……において明らかにせられた様である。吾々は此の問題に關する後者の理論をもつて、最も明瞭であり決定的であると考へる。』⁴²⁾

『需要と供給とは、眞に相關的であり且つ相換的な名辭である。一種類の商品の供給は、他の商品に對する需要を構成する。例へば農産物の一定量に對する需要は、之と生産費を同じうする製造品の一定量が、之と交換に市場に持出された時に存在する。反對にこの一定量の製造品に對する有效需要は、之と同じ費用によつて産出されたる農産物の供給が、その對價として市場に齎らされた時に存在する。』

『諸商品が、相互に交換さるべきものゝ生産費が等しく従つて價值の等しくなるが如き比例において市場に齎らされる限りは、一種類の財の供給増加は、他種類の財の供給増加を購買するための増加對價物を提供するであらう。……』

『この場合には、二つの物は相互に交換されるであらう。食物の供給は衣服に對する需要を構成し、また衣服の供給は食物に對する需要を構成する。』⁴³⁾

併しながらマカロックもまた、同じ傾向の他の論者と同じく、一般的過剰を否定すると共に、部分的過剰を肯

42) Edinburgh Review, October, 1819, p. 473-474.

43) Edinburgh Review, October, 1819, p. 470.

定する。即ち總ての商品が同時に過剰となるが如きは理論的に成立し得ないが、併し一部の商品が過剰となることは、理論的にも現實的にも成立し得ると考へる。

『商品に對する需要がその供給と同じ比例をもつて増大するといふ原理に對しては、恐らく次の反對がなされるであらう。即ち過剰商業によつて惹きおこされる過剰生産および停滯は、如何にして説明されるかと。吾々の解答は容易である。即ち產生過剰は特定種類の商品の供給が増加して、その對價となるべき他の商品の之に對應する供給増加を伴はないからである。』⁴⁴⁾

『一つの特定商品については、餘りに多量に生産されることは時にあり得る。けれどもあらゆる商品について、餘りに多すぎることは全くあり得ない。あらゆる過剰に對して、之に對應する不足がそこになければならぬ。誤りは餘りに多く產生した點にあるのではなく、それを交換せんとする人々の嗜好に適しないか、または自ら消費し得ない商品を生産した點にある。』⁴⁵⁾

『生産過剰は決して生産の増加に由來するものではなくて、常に生産力の誤用……の結果である。……そこに過剰の原因がある。それは生産過剰にあるのではなく、需要される羊毛の代りに、需要されない棉花を生産したからである。この誤りさへ是正されれば、過剰は消滅するであらう。……』⁴⁶⁾

『總ての商品種類の一般的の過剰は、あり得ない。一種類の過剰は他の種類の同じ不足によつて相殺されねばならない。』⁴⁷⁾

然らば斯かる特定商品の部分的過剰は、何故に惹きおこされるものであるか、この點に關するマカロツクの見解もまた、リカアドウその他の所説と同じく、結局は個人的の誤算に歸せられる。

『……若しもAが商品を生産して、之をBまたはCに向つて交換に提供し、之に對して彼等がAの得んと欲するものを提供し得なかつたとすれば、Aは誤算をなしたわけであつて、そこに過剰を生ずるであらう。……けれども是れは容易に是正さるべき誤りである。……』⁴⁷⁾

然らば此の個人的の誤算は何故に生ずるか、彼れに従へば、それは需要供給關係の變動に由來すると考へる。

『生産者の誤算または生産力の誤用は、あらゆる場合において、過剰の特殊の原因である。果して然らば、最も普通の場合において、この誤算または誤用を起さしむる諸事情について簡単に研究せねばならぬ。之は實際の見地においては、最も重要な研究

44) Edinburgh Review, October, 1819, p. 471.

45) Edinburgh Review, March, 1821, p. 118.

46) M'Culloch, J. R., The Principles of Political Economy, 1843, p. 209.

47) ibid., p. 193.

である。』

『誤算は、一般に、商品の需要と供給との間に存する從來の比率の事前的變化に由來する。産業のあらゆる仕事の中には、或程度の投機が含まれてゐる。原料品または生絲を仕入れて、之を衣服または家具に製造せんとする個人は、それが製造された後に彼れの費用を償ひ、且つ彼れの資本に對して通常の利潤を齎らすに足る價格を以つて、それが賣れることを豫想してゐる。』⁴⁸⁾

併して需給變動のために生産者の豫想が裏切られるに至るのは、例へば流行の變化、新市場の開拓等のために新たな需要を喚起し、之に對して新たな資本の殺到するために、遂に行き過ぎとなつてその商品の過剰を來すと考へる。

『誤算または過剰は、生産物に對する需要の減退によるよりも、寧ろより屢々その増大によつて惹きおこされることが發見される。』

『新市場の開拓または流行の變化、或はその他の原因のために、金物類に對する需要が急に増大したとする。かゝる需要増大の結果として、その價格は直ちに騰貴し、製造家および手持品を有した人々は、比較的に高い利潤を得るであらう。併し獨占の行はれない以上は……利潤率は一事業において他の事業におけるよりも高くまたは低く、一定の期間以上は永續することは出来ない。』

『然るに不幸にしてこの資本の移動が、金物の供給増加を前の價格で生産するに足る點において停止せずして、遂かに行き過ぎた場合には、そこに過剰を生じ、その結果として激動を生ずることとなる。』⁴⁹⁾

要するに、マカロツクにおいてもまたリカードウその他に於けると全く同様に、一商品の供給は他の商品の需要となると考へるから、商品の供給増加は同時に需要増加となり、従つて總ての商品の生産過剰または販賣停滯の如きは考へられない。機械の發明または資本の蓄積による生産力の發展は、必然に他方において需要または消費の増大を伴ひ、一般的過剰を惹きおこすが如きことはあり得ないと考へる。かゝる見解に對する批判は、すでに他の機會に論じた所であるから、こゝでは之を省略することとする。(一四・三・二四)

48) *ibid.*, p. 213-214.

49) *ibid.*, p. 214.